

少女雑誌の部屋から

昭和16(1941)年の太平洋戦争開戦後は、言論統制やパルプ資源の節約を目的として、出版社や雑誌の統廃合がすすめられました。少女雑誌の発行も減らされていき、昭和19(1944)年には『少女の友』と『少女倶楽部』2誌だけになってしまいます。それらも、戦況の悪化に伴い、ページ数は減少し、紙質も悪くなっていきました。表紙からは儂げな少女の姿は消え、健康的でたくましい少女たちが描かれ、内容も戦争に関する記述ばかり…少女たちはどんな思いで雑誌を手に入っていたのでしょうか。



雑誌紹介 17

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

小学女生 (実業之日本社) 大正8(1919)年10月号～大正12(1923)年10月号

『小学男生』とともに創刊された。小学校3・4年生を読者対象にした編集で、本文の大半が2色刷。童話では西條八十、浜田広介らが活躍。北原白秋や野口雨情などを動員して童謡にも力をいれた。大正12(1923)年、関東大震災の影響で、『小学男生』とともに『幼年の友』へ合併されて終刊を余儀なくされた。

女學生 (研究社) 大正9(1920)年5月号～終刊時期不明

『中学生』の姉妹誌として創刊。高等女学校及び小学上級の少女たちを読者対象としていた。「典麗絢爛たる新女学雑誌」という宣伝文句のもと、内容は少女小説を中心に、長詩、短歌、童謡など多岐にわたった。吉屋信子、西條八十、三木露風らが執筆し、表紙・口絵では武田比佐、本田庄太郎らが活躍した。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 17

岩田専太郎 (いわた せんたろう) 1901—1974

東京生まれ。画家・美術考証家。

旧制尋常小学校卒業後、日本画家の菊池契月、伊東深水しんすいに師事する。

大正9年、19歳のときに講談雑誌でデビュー。25歳で、大阪毎日新聞に連載された吉川英治の『鳴門秘帖』の挿絵を担当したことなるとひちょうから、一躍その名を世に知られることになる。その後も新聞、雑誌、時代小説、現代小説などで多くの挿絵を手掛けた。

「専太郎張り」といわれる画風を確立し、独特の美女を描いて人気を得た。

岩田専太郎の作品を観るには…弥生美術館・竹久夢二美術館(東京都文京区) 金土日館(東京都文京区)

少女雑誌の豆知識

異例の社告について

昭和21(1946)年、『少女クラブ』8月号に発行元の大日本雄弁會講談社(後の講談社)から戦争中の活動の誤りを認めて謝罪するという社告が出されました。

「本社では戦争中雑誌その他の出版物を通して國策に協力してまゐりました。この間本社の出版活動について考へますと、今日、読者の皆様に對し、ふかい責任を感じてをります。…(以下略)」

他の雑誌ではこのような社告は出されておらず、極めて異例なものでした。